



## 明治の佐伯三青年（十五）

——龍溪・鳴鶴・鶴谷——

### 御手洗 一 而

（会員・埼玉県川越市）

#### 沼間守一との休日

政府の言論弾圧に対して、各新聞社はじっと手をこまねいていたわけではない。あの手この手を考えていた。そして、各社は一流記者の拉致を覚悟し、編集名義人を置いて服役させる戦法をとった。こうなると、政府も黙ってはいなかった。見かねた政府は、更に弾圧の強化をはかるべく、虎視眈眈とその時機を窺っていた。

刑期を終えて出獄した成島は、「朝野」紙上に、「ごく内ばなし」と題して、十一回にわたる獄中記を連載し始めた。獄中記は、監獄制度の不備を描写批判したり、房中口伝で交換した各記者の詩作などを紹介した。

禁獄三年の「采風新聞」の加藤九郎は、

身は擗虎の如く鉄欄の囲

陰雨其れ濛河の日か帰る

法網厳なりと雖も夢を縛し難し

吟魂夜々自由に飛ぶ

と詠じている。

成島の出獄を機に、各社は、六月二十八日、記者達が「乱暴律」と呼んだ讒誘律公布の一周年に当って、多数の犠牲者の上に、新聞供養大施餓鬼を浅草観音堂で開催した。

この日、成島は世話人として、「祭新聞紙文」の一篇を祭壇に供えたが、「汝新聞紙ノ靈ニ告グ」という、政府に対する皮肉と抵抗の一文は、再度政府を刺戟した。

この機会を待っていた政府は、更に一条を追加して弾圧を強化した。この一条は、さきの条例に該当する新聞雑誌について、「内務卿に於て其発行を禁止し又は停止すべし」と、始めて発行停止を規定している。

そして、七月十日、当時もっとも過激であった「評論新聞」「草奔雑誌」「潮海新報」の三誌は、発行を禁止された。これらの新聞雑誌は、その後二度三度改題して

発行したが、その都度発行禁止を命ぜられ、やがて言論界から姿を消すことになる。中には好運の新聞もあった。過激紙と折紙つきの「采風新聞」は、加藤に続いて中島・矢野と主力が入獄し、事実上経営不能におち入り休刊中だったため、却って発行禁止を免れたという笑話まで残されている。

この時期、仮編集長の入獄が多いのは、すでに編集長は投獄されていたからである。この年の十二月四日には、更に追加条例が布告され、新聞の恐怖時代はますます急を告げることになる。

植木枝盛の投書による筆禍事件に関連して、つまらぬ責任を問われた箕浦は、矢野の入社もあって、釈放後三田に戻ることになった。箕浦の穏健な性格を心配した福沢が呼び戻したものであろう。

福沢は、一旦廃刊した「民間雑誌」を、改めてこの年「家庭叢談」として発行することにして、その編集に箕浦をあてた。各塾員は条例通り署名の上論文を発表し、無記名の論説は、主として福沢の主張を箕浦が代筆したものである。それでも箕浦は、新聞の経験を活かして、

落ち着いて編集にあたる事が出来た。

一方、言論界の不平等と呼応するように、この頃では旧士族の団結が噂されるようになっていた。幕臣はもとより、薩長が牛耳る新政府の恩恵に浴さない旧士族達は、維新後禄を離れ、新しい職もなく生活に困っていた。彼等に見れば、何が維新だと言いたかつたであろう。巷でも何かが起こりそうな気配を感じ、「西郷」の名が無気味に囁かれるようになっていた。矢野が沼間に誘われたのもそんな時であった。

「ばーん」

「やったぞ沼間さん。命中だ」

矢野は、輪を描いて落下する鴨を眼で追いながら、葦を分け分け犬を追い、沼間もその後が続いた。

二人は休日を約して行徳村に出掛けた。

この年の三月十二日に、土曜日は正午より休日とし、改めて日曜日を休日とすると定められていた。

「貴公大した腕だな」

維新の時、幕府の歩兵銃隊をフランス式に組織した沼間も、矢野の腕前に感心していた。

「いや、こいつともご無沙汰で腕も大分鈍ってござる」  
矢野は銃床をぼんと叩きながら思わず武士言葉になった。

「見あげたもんじゃ。お前のような奴ばかりだと幕府も負けなかつた。薩長に頭を下げることもなかつたんだが……」

沼間はこう言いながら声を出して笑った。

「おやし譲りか」

「いえいえ」

矢野は首を横にふりながら、佐伯の狩猟場であった前島（大入島）を思い出していた。

「沼間さん。こいつは伊勢流と申しまして、父直伝というより、藩祖毛利伊勢守公の奥儀なんです。元をただせば、伊勢守が秀吉公側近の時、織田の鉄砲師や津田流元祖に教わった、いわば日本元祖流というやつで、何でも伊達藩にも伝えたと聞いておりますが」  
矢野は半分茶化しながらいわれを話した。

「道理で筋金入りだ。それにしても十年前にその腕前とは恐れ入った」

沼間の率直なところが矢野にも好感がもてた。それか

ら、二人の話は会津戦争・英国留学・現在とつきるところがなかった。

元老院の話から、矢野は、沼間が現在官人であることの方が不思議であった。そして、話が現在の世情に及ぶと、沼間は嘆息交じりに述懐した。

「矢野、お前の意見と俺の意見は妙によくあう。英学のせいかもしれぬが不思議によくあう。ただし、旗本であった俺と、薩長とはいわないが、直接徳川に關係のなかつたお前とは、どうにもならぬ感情の差があるんじゃない。わしが栗本御大の顔を見なくなるのもそこじや」

沼間は話し終えると腕を組んだが、矢野もその感情はよく理解出来た。

「しかし沼間さん。その年で御大のように悟られても困る。昔は昔、今からの日本に政府も民間もありますまい。士族も平民も合体して国造りに乗り出さねば、文明の遅れは永久にとり戻せるものではない」

「そりやそうだ。不平分子が誰一人としてその理屈のわからぬはずはない。だが、徳川三百年の武士の意地は、善悪でわりきれれる程生やさしいものではないぞ」

「それはよくわかりますが」

「いやいや、お前や藤田らにわからぬかもしれぬ。こゝまでくると怨念じゃ。怨念が漂っている」

「となると、決起も予想されますか」

沼間はじつと考えこんでいた。

「あるかもしれぬのう。士族の不平分子は一種の残党じゃ。政府がこの残党の怨念を自然消滅の形でおさえられるか、奴等がいちかばちかの賭けに出るか、むづかしい問題じゃ」

「近頃では西郷の名も聞きますが」

矢野も思い余つたように西郷を口に出した。

「のう矢野。政府が今のままで人心を把み得るだろうか。わしはむづかしいと思っている。西郷はそれをよく知っている。だがなあ、西郷は西洋向きじゃないよ」

沼間はこう言って声高らかに笑い出した。

矢野はその解釈にとまどつたが、英国で西洋文明を学んだ沼間の言葉には意味があった。

「これだけの大改革じゃ。不平や不満はどこにも転がっているわい。確かに西洋文明の制度化は急がねばならぬが、こう足元がぐらついてはのう。こういう時は

力の決着があるものじゃ。西洋国家は何度もこういう歴史を繰り返している」

沼間はどう言って、傍の猟犬の頭をさかんに撫でていた。

矢野はじっと聞き入っていたが、意気投合した二人は、帰途新橋の料理屋に立ち寄り、差し向かいの話が続いた。

矢野は狩猟を介して、翌日、藤田に沼間のことを「面白い人物」と評したが、得るところも多く、「西郷は西洋向きではない」と言った沼間の言葉がいつまでも耳元に残っていた。ようやく西洋にも眼を向け始めると、この頃の士族の主張にも二通りあった。維新前の栄光を忘れられず、武士の復権を願う組と維新の主旨を体して文明開化を推進する組である。前者が過激派の急進論となり政府の外征派と通じると、逆に後者は内治派となった。

そして、有司専制といわれた新政府は、征韓論は排したが、内部における薩長のバランスは容易ではなかった。政府は、西郷の主張はしりぞけ、一旦下野した板垣や木戸を口説き、大阪会議で参議職を承知させて政府に復帰させたが、政府を預かる大久保との仲は必ずしもうまく

ゆかなかった。

木戸は漸進的に立憲主義の移行を明らかにしたが、大久保は政府の専制も一定期間はやむなしとした。そこには両巨頭の性格の違いもあったが、山口県と鹿児島県の扱い方にも原因があった。その後、板垣は早々に参議をやめ、木戸も三月二十八日付で参議をひき、大久保に對して、執拗に鹿児島県の処遇をなじった。

木戸の言い分は、長州は新政府の命令に従うが、薩摩はあくまでも薩摩の中で事を運ぼうとする。県令の人事にしても、鹿児島県は薩摩出身者を固執して大山剛良を置き、島津・西郷と結ぶ旧藩さながらの体制は、一独立国の様相を呈しているというのである。このまま放置しておく、政府の統治は鹿児島県に及ばず、政府はあまねく全国の人民のためのものとする木戸の考え方と差があった。

西郷という名の柱が、政府にとつては無言の圧力となっていた。

反面、西郷に何かを期待する一般民衆の感情はあった。矢野や藤田は複雑な気持ちであった。小藩に育った矢

野や藤田に、幕臣のような薩長に対する怨念はないが、かといって武士の復権など昔の夢に過ぎず、維新で薩長に先を越された土佐や肥後のような反撥もない。不満があるとするれば、新国家建設に関する政府の諸政策に対して、理論的な問題であった。

だが、政府にしてみれば、第二維新の新勢力ともいべきこの民権運動の風潮と、不平士族の台頭は両刃の剣であった。

そして、沼間がよく好んで使った「いちかばちか」が現実となった。その言葉に代表される不平士族の騒乱が、遂に九州の熊本県で起こった。「敬神党」をと見える思想集団、党人二百余人が決起して熊本鎮台を襲った。神風連の乱である。

(つづく)



#### 講演会案内

### 「町並保存と再生」の夕

日時 十一月七日午後七時

場所 佐伯文化会館

講師 降幡 広信 先生

建築家、古い建築物の再生については日本に於ける権威者で、各地の民家の再生を手がけて来られた。

この度、臼杵市の古い民家の再生について調査においてなるのを機に、来佐をお願いし講演会を開くことにした。

会員の皆さん、一般市民の方々のご来会をお願い致します。

主催 佐伯緑の会

佐伯史談会

後援 佐伯市役所他